三つのお題で短編集?

夜一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三つのお題で短編集？

【Ｎコード】
Ｎ５０３６ＢＡ

【作者名】
夜一

【あらすじ】
三つのお題で短編を作っていきます。
お題を頂けたら作るかも知れません。

始めたきっかけは先生に「三つのお題で短編書いて」と言われたからですｆ＾＿＾；

「ラグビー」「幼なじみ」「歯磨き」

ピィィー。
ホイッスルが鳴り響き、俺の高校ラグビーが終わった。なぜか涙は流れなかった。
〜帰り道〜
俺は川沿いの土手をゆっくりと歩いていた。
空が真っ赤に染まっていてどこまでも空は広がっており下を見ると影が後ろに向かって伸びていた。
「そこのラガーマン！待ちなさい！」
聞き覚えのある声が聞こえて声のしたほうを見てみると「腐れ縁のチビがいた」「私はチビじゃない！」
「なんとチビは読心術が使えるようになったみたいだ」
「アンタ口に出てるからね全部」
チビが詰め寄って来るが俺は、
「そら失礼。」
と芝居かかった動きで頭を下げて歩きだす。
「…なんだ。大丈夫そうじゃん。心配して損した。」とチビは俺の隣に付いてきた。
「心配したのかお前でも？」笑いながら言うと少し怒りながら、
「当たり前じゃん、最後の試合なんだから。」
俺はなんだか温かい気持ちになった。純粋にうれしかったのかも知れない。
「そっか、ありがとう。」自然とそんな言葉が出ていた。
「あら珍しい事もあった。滅多に感謝しないのに」
チビがなんか言ってるがスルーだスルー。相手にするとさらにうるさくなる。
「こら無視すんな馬鹿」
袖を引かれるが無視だ無視これ以上なんか言うと俺が不利になるか

らな。
「徹底的に無視か、良いわよこっちにも考えがあるから。」
チビなんか考えたらしいまあまたくだらん事だろう。チュ。
……え！えぇ！
「反応が無いのでキスしてみました！」
チビが馬鹿な事を言い出した。
「何にやってんだよお前は！馬鹿なのか？馬鹿なんだな？！」
マジでこいつ馬鹿だろ。
「バカバカうるさい！話しかけてんのに無視するのが悪い。」
「でも限度を考えろよ。いきなりキスするかよ。好きでも「好きだよ。」ない奴に…。マジで？」
「好きだよ。高校入る前からずっと好きだよ。」
チビが真っ直ぐに俺を見ている。
「時間をくれ。明日の朝には答えるから。」
俺とチビは、それからろくに話もせずに分かれ道で分かれた。

〜自宅〜
今日はいろいろありすぎて疲れたな、ラグビーは終ったしチビには告られるし……どうしたら良いんだ俺…取り合えず明日の朝には、答えを出さなきゃいけないのか…マジでどうしよう。確かにチビは嫌いではないけど恋愛対象ではないようななんでチビは俺を好きになったんだ？…いやチビは高校入る前から好きだと言っていた、だとしたら何かきっかけがあったはずだ。俺は悩みながらキッチンに行くと母が洗い物をしていた。
「今日あの子試合見に来たの？」
俺は少し驚いた。母はあまりラグビーに興味が無く、自分からラグビーに関係するような話をしないのだ。そしてチビの話をするのも珍しい。
「あぁ、来たよ。一番前で応援してくれたよ。」
「そう、最近うちに来ないから、諦めたのかと思ってた。」

俺は母が何を言ってるのかわからなかった。
「なんのこと言ってんだ？」
母は手を拭きながら言った「将来の夢はあんたのお嫁さんがあの子の夢だったでしょ」
……マジか。そんなに前から……ダメだな俺…全く気が付かなかった、それどころか忘れてた。
ハハッ…マジでどうしようもないわ。

俺は家を飛び出していた。母が何か言ってたけどわからない、後で聞けば良いや、今はチビの所に一分一秒でも速く行きたい。
ラグビーで鍛えた足は直ぐにチビの家に着いた。
俺は裏手に周り庭の木を登りチビの部屋の窓を叩いた。
直ぐにカーテンが開き窓が開く「何やッ」
もう体が勝手に動いていた、俺はチビを抱き寄せキスをしていた。
「好きだ。」
チビはぽうっとした顔で
「え？」
もう思いが止まらなかった「好きだ。俺はお前が好きだ。だから俺の隣で一緒に一生居てくれますか？」
チビはポロポロと涙を流しながら俺を見ている。
「ずるいよ。もう答えはわかってるのにもう一回言わせるなんて。」
「もう一度俺はお前の口から聞きたい。」
チビは涙を拭いながら
「私もあなたの事が」
今までで
「大好きです」
最高の笑顔だった。

〜朝〜

洗面台で歯磨きをしていると昨日の事を思い出す。
あのあと家に帰ると母は笑いながら「頑張ってね」と言われた、仕組まれたかもしれないが後悔はしていない、てかするわけが無い。
そろそろ出るか今日はチビと一緒に登校するから速く行かないとな。
玄関でマフラーをしながら靴を履きドアの前に立つ。「フゥ〜。んじゃ、いってきます。」
今日から隣は幼なじみから彼女になりました。

「服」「箱」「走る」

会いたい…

いっもそれだけを考えて過ごしていた。

いつも隣に居たきみは…

いつの間にか遥か遠くに行っていた。

私はそれを知っているのに追い掛けなかった。

いずれ追い付くと思い込んで…走るのをやめたのだ。

そしていま……

きみは白い箱の中に入って眠っている。

私は君に会うのにこんな真っ黒な服で会いたくなかったよ…。

きみの行った場所やそこで会った人の話を温かいきみと笑いながら

驚きながら聞きたかった……。

まあ…何と言うか…

…言葉は……見つからないけど……

来世が本当に……あるなら……もしあるなら……

『次こそは一緒に…。』

「隣」「距離」「どっつく」

「ねえ。なんで、私の隣に居ないの？」
君はいつもそう、私が歩いてる半歩後ろに必ずいる。隣に居るのは、休日の日だけ。
会社や外では、いつも後ろでニコニコと笑ってる。
「なんでって、僕は決めたんだ。
君と僕の距離はあまりに近くてもっとも遠い。
だったら君の隣じゃなく、背中を護ろうと、決めたんだ。」
君は、照れたような笑顔で言いきった。
「バカタレが少しは隣に立とうと努力しなさいよ。」君は、苦笑して
「いつもながら厳しいな。だからこそ君の背中は護ってみせるよ」
「あぁ。任せるよ。
だから君はわたしが立ち止まったら、どっついてでも進ましてね」

「死」「大切」「後悔」

私はあなたに会えてよかった。
私はもう少しで死んでしまう。
でも、私はあなたを離したくない。
あなたは私の大切な人。
死の近い私とは違ってまだまだ生きて行ける。
なのに私はあなたを愛してしまう。
あなたは私のそばに居ては、絶対に後悔するのに。
あなたは私のそばにいつも居てくれる。
一度、たった一度聞いた事があったよね。
「いつ死ぬか分からない私のそばに居て楽しいの？
あなたなら彼女なんて幾らでも作れるでしょ？」
私は言った後に後悔をした。
何でこんな事を言ってしまったんだ…
あなたは私を嫌いになってしまうのではないか、私はとても恐くなって顔をそむけてしまった。
「彼女か…」
あなたは困ったような照れたような声で反応した。
「だって私は歩けないしベットから一人で起き上がる事すら出来ないんだよ？」私の声は震えていた。
「私は「うん、ありえないな。」え？」
あなたは私の話を遮ってきた。
「何がありえないの？」
彼は笑って、
「僕はね…君以外の人を好きになれないよ。
だって、僕は
君以外の人と居て
心の底から人を愛した事は無いんだから」

自然と私の頬をなみだが一筋流れた。
その日私は声を上げて泣いた。

あの日から一年が経った。
あなたはいつもどうりの時間に白いドアを開けて笑いながら入ってくる。
その笑顔を見ていると
私はあなたに会えて本当に良かったと思う。

本当にありがとう。

「野球ボール」「チャイム」「窓ガラス」

まず、あなたに心からの感謝を。
私の側に居てくれてありがとう。
この真っ白な部屋から出れない私をあなたは愛してくれた。
この何も無い部屋にいつもと違っていたのは窓ガラスを割って入ってきた一つの野球ボール。
心配してお母さんが急いで来たら転がっていたボールと割れた窓ガラスを交互に見て苦笑い。
少しすると家のチャイムが鳴った。
お母さんと誰かの歩く音がする。
お母さんがドアを開けて入って来ると後ろにお母さんより少しだけ背の高い青髪の男の人が入って来た。
青髪の男の人は私を見ると少しだけ驚いたような顔をして、謝ってきた。
彼が野球ボールの持ち主らしい。
それから彼はよく家に来るようになった。
一年後には彼と一緒に居るのが当たり前になった。
彼は部活が終わると直ぐに家に来て私の介護をしてくれるようになった。
私は一度、たった一度だけ彼に聞いた。
何で私の介護をしてるの？と。
彼は笑って、
何でってお前の側が一番暖かくて俺が人生で初めて好きになった人の側だからだよ。
って笑われた。
私は顔が自分で解るぐらいに紅くなっていただろう。ただ一言、バカッっと言って布団で顔を隠した。
彼は私の自慢の赤のようなピンクの様な髪を手で剥いていた。

私はそのまま眠りに着いた。

「…ぉぃ……あさ……はゃ……ほら起きな、朝ご飯だぞ。」

「……あれ？老けた？」「…色々と突っ込みたいが寝ぼけすぎだ。」

……そうだあれから4年も経ってるんだ。

「早く起きろ～飯を食べる時間が無くなるぞ」

「分かってるよ。車椅子に乗るから手を貸して。」

彼はハイよと私を簡単に持ち上げると車椅子に座らした。

「ねぇ…」

私はあの時の質問をもう一度した。

「どうして私の介護をしてるの？」

彼は立ち止まって背中を向けたまま

「お前の側が一番暖かくて、俺が人生で初めて好きになった人の側だからだよ。」

彼はあの時の言葉をサラッと答えた。

「やっぱり私はあなたの事が…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5036ba/

三つのお題で短編集?

2012年1月13日23時53分発行